

もうひとつのほうの生命は隠れています。経験領域の中にまで進出してくることは稀にしかなく、わたしたちは信じなければなりません、世話もしなければならぬものです。そこから、わたしたちがこちらのほうの生命の心配をしない、そして古いほうの生命によって押しつぶされるに任せておくといった大きな危険が存在しています。そしてその場合には、自然的な呼吸のほうは力強く進行しているのに、隠れたほうの、聖霊から来ているほうの呼吸はますます弱くなっています、そして或る時本当に止ってしまうということにもなりかねません。新しい内的な生命は、子供の繊細な生命がその子の母親の手の中に与えられるにも似た仕方、あるいは危険に曝されている生命が介護者の手の中に託されるにも似た仕方、わたしたちの手の中に神によって与えられているのです。ですから、わたしたちは、この生命がわたしたちにとってどれ程の価値を持っているのかと自ら問わねばなりませんし、そこからいくつかの結論を引き出すこともしなければなりません。わたしたちは、この生命を維持し発展させるために必要なことをすることに致します。わたしたちは、宗教的事柄における内的な真正さと誠実さについて、さまざまな語り口に惑わされることのないようにし、真理が——神の言葉の真理と、この真理によって明らかにされ勇気付けを得て、人間的経験の真理が——わたしたちに薦めることを実行していくことにします。

準備の必要性

宗教的な事柄における人間の姿勢は人を不安にさせるほどの矛盾を孕んでいます。人間は神を

必要としている。人間には、そのことが分かっている。自分を創造された方であり、自分がいま生きているのもその方の権能の故であるその当の方を求め探してもいる——ところが、その同じ人間が、これほどの結び付きについて全く何も知らうとはせず、神を避け、神に抗おうとしつづけてもいる。この矛盾は祈ることと人間の間柄においても示されています。人間が祈りという聖なる奉仕、勤めを受諾し実行するや否や、その人は真理を実感し、気分も良くなります。それにも拘らず、人間は祈ることができるところでも、祈ることは避けて通るのです。人間がそうするには沢山の理由があります。しかし、何よりも、神を知覚していない、もっと正確に言うならば、事物や人間を知覚している仕方では知覚していないということがその理由です。世の事物や人間たちは現にここに立っている、近づいてくる、働いている、行動している。そして、これらのものは直接に触れてくる、五感がそれらのものを捉えている、欲動と意志が答えています。ですから、これらのものとの交わりは自ずから始動していくことにもなります。神はもちろん現実に存在しておられます。それも、どの事物よりも現実的に実際に現にここに存在しておられます。けれども、その存在は露になつていると同時に覆われてもいます。あの方を見るのは信仰の眼です。あの方を経験するのは愛している心です。ところが、この眼には屢々ベールが掛かっていますし、心は屢々鈍感になつています。そうなつているとき、神については人は経験するということもなければ、勤が働くということもありません。そのような場合には、あの方との交わりはただ忠実のみにもとづいて、それも一見暗闇で空虚と見えるものの中へと向けてなされねばならないことになります。これは極めて骨の折れることになります。人間は神に起因して生きているのに、

祈りの準備と秩序

神との関係の中に踏み入ることはこれ程までも骨の折れることなのです。——否、神との関係に入ることに嫌悪感を覚え、凡ゆる口実に手を伸ばして、この関係に入ることを回避しさえするのです……。——ひとつの大きな秘密です。ところで、人間が自分の感情だけに従っていくなら、

祈りに対する欲求は早晩もはや全くなくなってしまふであまりましよう。そしてそうなった時には、その状況こそがまさに真実なのであり、「祈るように」と自分を強制するよりは、むしろこの真実に従っていくほうがよいのだと言ってしまうことにもなりえますが、これは極めて憂慮すべきことです。このような言い方が許されるためには、人間は自分の宗教的感情に全面的に信を置くことができればなりません。けれども、人間はそうすることができるのでしょうか？ 病人が自分の「感覚」に従っていくとき、そこにも真実はあるのでしょうか？ 理性的な人なら誰でも、この感覚そのものが信を置いてはならないものだと言うであまりましよう。つまり、もっと優

れた洞察にもとづいて、たとえば経験ある医師の判断などに従って、ひとつの規則を立て、その規則に従っていかねばならず、そうすることによって、その病人も、その病人の感覚も共に健康になつていく、そしてその時初めて、自分の感じを信頼することができるようにもなる、と言うのではないのでしょうか？ わたしたちの問題でも事情は全く同じです。というのは、神とわたし

たちの、そして世界とわたしたちの間柄という点でわたしたちは健康ではないのです。それ故、わたしたちは非随意感覚をわたしたちの宗教的行動の尺度とすべきではなく、照らしを受けている判断に従わねばなりません。そうすることによって、わたしたちの感覚も含めてわたしたち自身を正常な状態へと持っていくかねばならないのです。「内奥」の欲するところを行なうという、

自称の正直は得てして眞実の回避を意味していることがあるものです。ですから、わたしたちは祈りにおいても正しいことを認識できるようにならねばならず、そして認識した正しいことを誠実に、そして己れ自身に打ち勝って行なってもいかなばならないのです。

第一のことは、祈りに向けてわたしたち自身を準備することです。対応することは世俗的な事柄にも既に当てはまるではありませんか。何か真剣なことをしなければならぬ人は、いきなりそのことに取り掛かるようなことはせず、課題が要請していることに向けてまず自分の心を統一するものです。高尚な音楽をそれに相応しい仕方であらうことを知っているほどの人であれば、開演直前の最後の瞬間に飛び込んで来て、表通りの喧騒から離れる間もなしに、いきなり聴き始めるようなことはせず、余裕をもって入場し、これから知覚しようとしている美しきものに向けて自分自身を準備するものです。大切なこと、重大なことに對する觸覚をいつも持っている人なら、そのようなことに手を付ける前には、散漫な放心状態から自己を離し、自分自身を内的に正常な状態に持ってきておくものです。このことは祈りの場合においても当てはまります。しかも、既に述べたように、神は隠れておられ、信仰において探し当てねばならない方であるだけに、ここでは遙かによく当てはまります。祈るということもひとつの宗教的行為です。ところが、この行為の中で目覚め、自己の——この語を用いることが許されているとして——対象の方を向くべきものは、考えたり実行したりする力だけではなく、心情の内面性、もっと正確には、秘密に満ちた聖性、神の聖性に人間の側において対応しているものそのものなのです。このものは日常の生活の中では沈黙していて、せいぜい、そのものからの微かな振動が表層にまで伝わってき

ているのみです。普段の通常の状態においては、人間は現存在(現存)の世俗的領域で、しかも現存在のは、聖なる方に属しているものが自らの空間を得て、前面に立ち現れてくることができなければなりません。

ですから、準備が必要です。そして一般的には、準備の出来具合に応じて祈りも善いものになっていくと言うことができます。この準備はどのようなものである筈なのか、どのようにして実行心を統一するという言い方で叙述するのがよいでしょう。

心の統一

心の統一、ないしは集中という言葉が意味しているのは、ひとつには、落ち着くということである。普段は人間は数多くの物事によって四方八方へと引っ張られています。好意的な接触や敵意のこもった接触によって刺激を受けています。欲求や恐怖、心配や情熱によって攻め立てられて構築しようと、あるいは破壊しようと、あるいは弾き返そうと、獲得しようと、あるいは排除しようと、あるいは、欲するとは、或る目標を目指して、あるいは何らかの危険から遠ざかろうとして、道の途上にあるということです。人間というものが存在するようになってより、

ずっとそうであつたわけではありませんが、近代人にあつては特にそうです。近代の人間は自分自身を活動的人間、戦闘的人間、創造的人間と名付けることが好きです。しかも、この命名は半分しか当たってはいないのです。暫し留まって深く潜心するという能力はなく、人間や、事物、思想、言葉を無数に消費していながら、それでもなお決して満たされることはなく、しかも核にして中心であるものとの繋がりは相当のところまで失つてしまつていて、自分の知識と能力も含めて程こそぎ偶然へと引き渡されてしまつている落ち着きなき人間と自らを名付けるとしても、同じ程度には当たっているのです。否、むしろこちらの言い方のほうがもっと当たつてすらいるのです。このような人間が祈りをするようにと言われているのです——祈るということはこのような人間にもできるのでしょうか？ それは、絶えず駆り立てられている状態から抜け出て、落ち着く場合以外にはできないことです。

つまり、その人は彷徨^{さまよ}いまわる欲望を捨て去り、今ここで大切な一つのことだけに心を向けるのでなければなりません。その人は意志を解き放ち、「今は祈ること以外になすべきことはないのだ。これからの十分間は」——ないしは、その人がどれくらいの時間を自分に設定したとしても——「このことのためにだけと決められている時間である。他の一切のものは、ここにはない。わたしは全く自由であり、このことのためにのみわたしはここにいます。」と自分に言い聞かせなければなりません。しかもその際、その人は正直でなければなりません。人間は狡猾い被造物ですし、人間の心の狡猾い策略は何よりも宗教的なことの中で示されてくるものです。人間が祈り始めると、すぐに——その人の内奥の忙しなさに呼び出されて——何か別のことが殺到してきて、

祈りの準備と秩序

成しとげることを求めるのであります。考えうる凡ゆること、何かの仕事、何かの話合い、何かの手配、何かの確認、どこかの新聞、一冊の本などのほうがその人には大切と見えるようになります、その人にとって祈りなど全くの損失にすぎないと思えてくるのです。ところが、だからといって、祈りを中断しようものなら、やっとのことでこれだけしかなかった筈のその時間は、その瞬間に一挙にしてあり余る程あることになり、しかもその時間を一番必要のない事々のために浪費することにもなるのです。自分の心を統一するとは、忙しなさのこの欺瞞を超克して落ち着くことを、そして、ここには属していない一切のことから自分を自由にして、今この時にただおひとり大切である方の、すなわち神の用に自分が供された状態になっていることを意味しているのです。

ここで問題の中心となっていることは、わたしたちが言っていることは、人間が現実にあるところに在る者となるようにということである、と表現することもできます。人間が祈ろうとする気になるや否や、そういう気持ちになったその事がその人をどこか他の場所へと駆り立てることになります。そして、その人が立ち上がって、そこを離れ、隣の部屋へと、外の通りへと出て行くとき、あるいはどこかの店の中へ入って行くとき、この駆り立てるに従うことになるのです。窓のほうに眼をやって外を眺めるとき、あるいは何かの本を手にとるとき、あるいは何か別のことを思い浮かべるとき、誰かのことを、職業上の事柄を、その他何であるにしても何かを思い浮かべるとき、そうすることになってしまふのです。いつでも内奥における落ち着きの無さがその人を、決定的に大切なその場所からは、即ち義務であるこの此処からは駆り立て、引き離そうとするの

です。この場所は、「事が遊びでなくなる」場所、屈することなく堪え抜かねばならない場所であり、自分自身の自己が生ける神によって呼び掛けられている場所、従順のための場所であります。この場所の、要求を突きつけてくる静寂は人間には不快なものとなり、人間は逃げ出すことになります。その人に向けられている命令がその人のほうに近づいて来る場所であるとともに、ただその人ひとりだけにとつての「指定席」となる筈の場所でもあるこの聖なる「此処」からは、人は絶えず逃げつづけることになります。そして時には、人は、世界を手中にしていくなかで、に反比例して、本来のものにおいては場所なき者となっていくとすら見えることもあるのです。

祈ろうとするとき、人間はこの一切から自分を取り返してきて、現実にもその場にいる者とならねばなりません。これは難しいことです。それは、自分が現実にもその場に存在するのも、そして自分の側でもその場を支えることができるのも、直接に権能を持つ或る特定のものに自分が支えられているからであるのに、このものを自分の前に実感するということは人間は殆どないからです。しかもそれにも拘らず、その人がこの難事を成しとげ、生き生きした内面性を伴ってその場に現在するようになることに、一切は掛かっているのです。

この言葉の原義を示唆しながら、「心の統一」とは一つになっていることを意味する、と言うことができます。わたしたちの生活を一瞥するとき、わたしたちがどれ程そうなっていないかが見えてきます。わたしたちは生活の多面性を担ってくれるひとつの堅固な核をわたしたちの中に持っていない筈なのです。一切の活動がそこから出ていき、そこへと帰って行く

ひとつの中心を、大切なことと大切でないことを、目的と方法とを分け、様々な行為や体験をランク付けするためのひとつの秩序を、変化の中にあって留まっているもの、移り変わっていくことの中で展開していく堅固なるものを、そして、わたしたちが何者なのかを明瞭にしてくれるとともに、わたしたちの考え方、姿勢が誰にでも分かるようになる堅固なものを、わたしたちはわたしたち自身の中に持っていなければならない筈なのです。このようなものはわたしたちにはあまりありません——遙かに深いところまで達しているとともに明確でもあった秩序を持っている昔のいくつかの時代の人々と較べるとき、わたしたち近代の人間にはこのようなものは本当に少なくなっているのです。

このことは祈りにおいても示されています。靈的師父たちは散漫ということに、すなわち人間に中心も統一もなく、その人の思いは次から次に別の対象へと彷徨いまわり、その人の感情も定まらず、その人の意志も本来の可能性に対しては無力であるような状態について繰り返し言及しています。そこには、語っていると同時に、語り掛けられることもできる、ちゃんとした「誰か」と言える人は本来は存在せず、存在するのは、雑多な考えの混濁物、様々な感覚の流れ、色々な印象の通路だけです。ですから、心の統一とは、この言葉自身が極めて視覚的に述べているように、祈ろうとする人が自分を「一つに集め、纏める」ことなのです。あらゆる方向へ向けて脱線していく思考を連れ戻してくること——これ自体が極めて骨の折れる仕事ではあります——そして、そうすることによって一つになった心情、心を祈りの用に供することなのです。これが、聖書にある、あの呼び掛けられている者と共に、「はい、ここにいます」と言うことができるよう

にしてくれる状態なのです（サム上三・四）。

四番目の、そして最後の定義としては、自分の心を統一するとは、目覚めるということです。心の統一ができていない人間からは独特な感じを受けることも稀ではありません。その人は常に何かに向けて緊張しています、何らかの目標への途上にいます、何らかの企てに携わっています——ところが、この緊張が緩むや否や、その人はたちまちにして空虚になり、生気をなくしてしまいます。その人を捉えている対象がなくなったとき、その人を前進させる推進力がなくなったとき、その人を魅了している刺激がなくなったとき、その時には活動性全体が崩れ去ってしまい、奇妙な荒廃が出来上がります。外向きのあの忙しなさや内奥のこの無気力とは明らかに共属しているものです——激しい情熱の人が冷い心の持ち主であることが屢々あるにも似ています。否、あの忙しなさの下には既にこの無気力が横たわっていて、あの忙しなさという刻印を規定しているのです。それに対して、自分自身の中へと自己を集中して統一し、静かになり、深みの中へと入っていく能力のある落ち着いた人間は、内的にも目覚めています。落ち着きという状態と内的な覚醒という状態も、同じように互いに共属しあい、担いあい、規定しあっているのです。

したがって、心を統一し、落ち着きを取り戻し、現実にもその場にいる者となる人は、内奥にある重荷と苦悩をも超克します。その人は立ち上がり、軽やかになり、自由になり、晴やかになります。向かうべき諸対象に生き生きと立ち向かっていくことができるように、注意力を目覚めさせます。はっきりと視線を定め、ちゃんと見るができるように、内なる両眼の曇りを払いま

す。心構えを呼び出してきて、出会いが可能となる状態を備えます。

心の統一^①は他の無数の個別行為と同列に置いてよいような普通の個別行為ではなく、内奥の正しい状態そのものであり、人間と事物に対して正しい関係を持つことができるように人間をしてくれるもののものであります。ですから、心の統一の本質は極めて多様な出発点から出発して定義することのできるものであり、これまで述べてきたことも、その豊かな充滿の中から幾つかを例示するものでしかありません。

心の統一^①ということを実行することは簡単ではありません。最初のいくつかの助走のあとで、興味も失せ、そのうえ内面の混濁がともに明瞭になってきてもいる場合などは、特にそうです。けれども、それは単に難しいなどということ以上のことなのではないのでしょうか？　そもそも可能なことなのでしょうか？　わたしたちは外的、内的な諸作用という織物の中に極めて密接に織り込まれてしまっているために、わたしたちにできることは、あるがままの現実のままでいることだけであって、もっと大きな統一^①といったものが徐々にではあっても出来上がっていくかどうかは、成り行きに任せる以外に仕方のないことなのではないのでしょうか？　心を統一しようとする試みなど、自分の髪の毛を引っ張って底無し沼から抜け出ようとものがくあの男性の試みにも似たものなのではないのでしょうか？　その人は、自分自身の中にいると同時に、自分の外にもいて、自分自身を掴むことができるための足場が自分にはあると前提しているのではないのでしょうか？　この問いは異様と聞こえますが、この問いは正当な問いです。しかも、この問いには肯定をもって答えねばならないのです。というのは、実際にペルソナの本質とは、自分自身の中にも、

自分の外にも存在していることなのです。つまり、自分を抜け出て成長していくと同時に、自分を手中に収めてもいることにあるのですから。自分が存在していると同時に、自分自身の中から再び開始していくこともできることにあるのですから。このことがどのようにして進行していくのかを、わたしたちはここで解説することはできません。なぜなら、そのためには、人間の本質についての問い全体を繰り広げねばなりませんから。わたしたちはむしろ次のように言うことにします。「信じなさい。そして、勇気を出してやってみるなら、実際にそのようになるということをあなたも覚^{（覚悟）}ることになります。あなたが踏みしめることになる秘密に満ちた点、そしてそこからあなた自身を手中に収めることもできる秘密に満ちた点がそこにはあります。この一歩を踏み出してみなさい。そうすれば、あなた自身がその点を実際に感じ取るようになります。否、ここで問題になっているのは、単にひとつの点であるだけではなく、ひとつの力でもあります。それは、絶えず変遷していくもの、逃げていくもの、溶けてなくなっていくものとは別のものです。それは本質的なもので、永遠の価値を持っているものです。あなた自身がそのもの、あなた自身の本来のものなのです。その点からなら、あなたの忙しなさを落着きと静けさへと変えることが、場所を掴みとって現実とその場に現在する者となることが、ありとあらゆる方向に向けて散り散りになっているものを一つにすることが、重荷となっているものを解き放ち、無気力な重苦しさを晴れやかにすることが、あなたにもできるのです。」

この意味での心の統一をもって祈りは始まらねばなりません。心の統一は簡単ではありません。

わたしたちが所有している統一の度合がどの程度のものかは、わたしたちがこれをしようと本気で努力してみると、初めて気付くことになります。落ち着きを得ようとわたしたちが試みるや否や、その時こそまさに、落ち着きの無さがわたしたちをまともに覆ってくるようになります——それは、毎夕、眠りに就こうという気になると、日のある間はついぞ見せたこともなかったような権能で、あの気掛かりなこと、あるいはこの願望がわたしたちを襲ってきたりすることにも似ています。わたしたちが実際にその場にいる者となろうとすると、まさにその時こそ、自分たちがどれほど激しくありとあらゆる方向へと連れ去られていっているのか気付くことになります。わたしたちが統合されたものと、自分自身に対して権能を行使できるものとなろうとするや否や、その時こそ初めて、散漫とはどういうことなのかをわたしたちは体験することになります。そして、わたしたちが、聖なる対象のために目覚めたものになりたいと、受入れ態勢をつくりたいと思うと、わたしたちは、わたしたちの心情、気持ちの低い方へと引っ張る無気力な重苦しさを実際に心で感じとるのです。けれども、この一切は変えようのないことです。そして、わたしたちはこのことに持ち堪えねばなりません。そうしないなら、わたしたちが祈ることを学ぶことは決してありません。

全ては心の統一に掛かっています。心の統一に向けられる努力が無駄骨に終わることはありません。そして、心を統一しようとするだけで祈りのための時間が全て過ぎてしまったとしても、その時間は善い使われ方をしたことになるでしょう。というのは、基本的には、心を統一するということが既に祈ることなのですから。そう、落ち着くことができない時、病気の時、疲労

の激しい時などには、この「心の統一」という祈り」だけで満足しておくことが、為になることも時としてはあります。そうすることが落ち着きを与え、強め、助けとなってくれるのです。ところで、もし誰かが差し当たっては、この関連で自分がどれ程酷い状況にあるかをちゃんと見ることで、それ以外には何も達成するところがないとしても、それでもその人は既に何かを獲得することはしたのです。すなわち、或る意味でその人は散漫ということの背後にあるあの点に触れることはした筈なのですから。

祈りの空間

心の統一によって、祈りのための空き、あの内的な空間が成立します。ただし、空きとか空間とかいった命名は本来はあまり正しいものではありません。というのは、この空間は「物質的身体的な意味で」外にあるのでも、内にあるのでもなく、「霊の中に」あるものですから。それも、全く普通の意味での霊の中に、つまり、思考作用における形象や意志作用における意図が存在しているところにあるのではなく、「聖霊の中に」あるのですから。この空間は、諸々の事物が存在する場となっている物的空間や、様々な表象が存在する場となっている意識空間のように自ずから既に存在しているものでもなく、神と向かい合うなかで初めて成立してくるものです。それは、二人の人間が真の意味での「わたしとあなたという間柄」において互いに向かい合うやいなや、ただちにその二人がその中にいることになるようなあの空間、二人だけのあの特別な世界